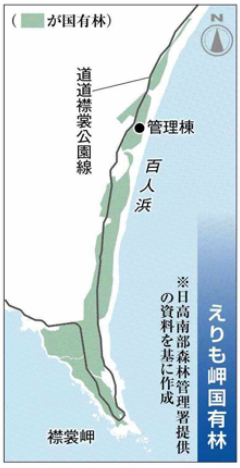
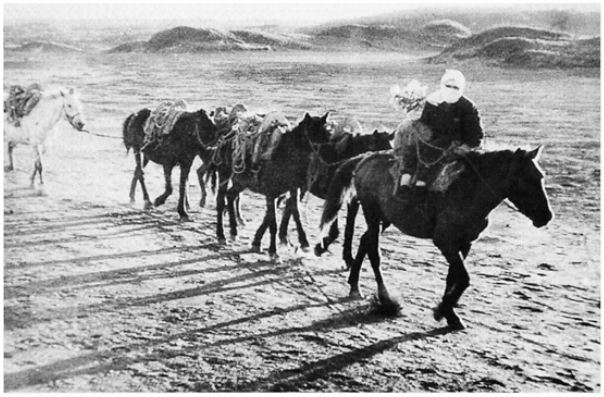
年　　組　　名前

道新でワークシート

襟裳岬 豊かな森へ挑戦続く

70年にわたる事業で緑がよみがえった襟裳岬周辺
（本社ヘリから小室泰規撮影）





草一本生えず「えりも砂漠」と呼ばれた当時の襟裳岬周辺（えりも町提供）

「砂漠」緑化事業70年

乱伐で木が失われ、かつて「えりも砂漠」と呼ばれた日高管内えりも町の襟裳岬周辺で緑化事業が始まって今年で70年。強風の地で、さまざまな試みの末に緑がよみがえった。海外からも視察に訪れる緑化の成功例とされるが、実はまだ道半ば。多様性のある森づくりに向けて、今も試行錯誤が続いている。

襟裳岬に近い、百人浜に広がるクロマツ林。10月30日に行われた育樹祭で、枝落としに励む飯田英雄さん（64）、直宏さん（38）親子の姿があった。地元に住み、ともにひだか南森林組合（同管内様似町）で国有林の整備などに携わる。

えりも岬国有林の緑化事業が始まったのは1953年。英雄さんの父の故常雄さんは、コンブ漁師をしながら住民をまとめ、浦河営林署（当時）と協力して緑化に取り組んだ中心的存在だった。苫小牧の高校を卒業後、父に呼び戻された英雄さんが森づくりに携わって40年以上。「今でもおやじに見られていると思い、ほめられるよう心がけてきた」。３代目のバトンを受け継ぐ直宏さんも「祖父や父がつないできたことを自分なりにできれば。この森を守っていくことが今の目標」と言う。

開拓期以降の乱伐で砂漠化した襟裳岬周辺では流れ出た土で海が赤く染まり、コンブや魚が取れなくなった。緑化開始後も強風との戦いが続いた。最大風速10㍍を超える日が年間270日もある土地。裸地に牧草を植えるも、防風垣は倒され、地面を覆う木の枝の束ははがされた。そこで導入されたのが、「ゴタ」と呼ばれる雑海藻を地面にかぶせる「えりも式緑化工法」。肥料と重しを兼ね、緑化は大きく進んだ。

草による緑化完了後の71年には、かつて試みた木の植栽を再開。もともとあったカシワなども植えたが、残ったのは潮風に強く砂地でも育つクロマツだった。その後も、防風土塁や防風堆雪柵など強風から苗木を守る手段が編み出された。

緑化対象の192㌶に植えた木の７割はクロマツで、３割がカシワなどの広葉樹。ただ、樹齢や樹種が同じ森林は病虫害に弱く、そもそもクロマツは地元に自生しない。日高南部森林管理署（同管内新ひだか町）は、広葉樹を増やしてこの地域に以前からあった混交林を目指す方針だ。

緑化事業は環境問題の研究や教育にも役立っている。今年10月には国際協力機構（JICA）の招きで来日した、アジアやアフリカ各国の森林管理や土壌保全の専門家らが植林地を見学。「クロマツの植栽密度は」「カシワがうまく育たなかった理由は」と、案内の同森林管理署職員に質問した。ベトナムからの参加者は「自国でも台風で土砂崩れや土壌浸食が起きている。ここで森林を再生させた方法を活用したい」と話した。

えりも中は植樹、えりも高では枝落としをそれぞれ生徒たちが授業の中で体験し、自分が植えた苗木の成長を数年後に確かめることもある。大西正紀えりも町長は「町民は70年前から意識しないでSDGs（国連が掲げる持続可能な開発目標）を実践し、子どもたちも森の大切さを理解してくれている。これからも事業を継続してほしい」と話している。　（加藤敦）

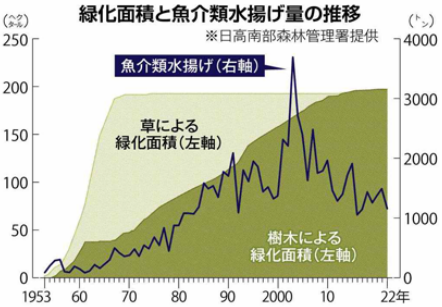
親子３代で森の手入れを続ける飯田英雄さん（左）と直宏さん

襟裳岬緑化事業をめぐる動き

1940年	日高支庁浦河林務区署（当時）で緑化事業開始、後に戦況悪化で事業中止
53年	浦河営林署襟裳治山事業所が設置され「はげ山復旧事業」として緑化開始
57年	雑海藻を草地の肥料と覆いに活用する、「えりも式緑化工法」を開発
70年	当初計画の192㌶の草地化完了
71年	クロマツ主体の植栽を再開
75年	防風土塁の建設に着手
81年	日高山脈襟裳国定公園に指定
86年	カラマツ防風堆雪柵（後のハードルフェンス）を採用
92年	クロマツの本数調整伐を開始
2006年	当時の天皇、皇后両陛下が植林地視察
11年	本数調整伐後に広葉樹の植栽開始

緑化面積と魚介類水揚げ量の推移

※日高南部森林管理署提供



㊤えりも岬国有林の多くを占めるクロマツ林。日が差し込みにくい
㊦わずかに残る天然林。クロマツ林をこうした森に変えていくのが目標だ

年　　組　　名前

道新でワークシート

① 襟裳岬の緑化は飯田常雄さんが中心になって進められました。
さて、飯田さんの職業は何ですか。

② 林業の専門家ではないのに、どうして、漁師さんが緑化活動に取り組んだのでしょうか。

③ どうして、えりも中やえりも高では学習の一環として、生徒が植林体験をしているのでしょうか。自分の考えを書きましょう。